
はじめに

近年我が国では、超高齢化社会への進行やライフスタイルの多様化等により、介護職へのニーズは多様化し、さらに高度化しています。言うまでもなく、介護福祉士を中心に介護職の担う役割はさらに重要になっていきます。そして要介護者ひとりひとりのニーズに対応できるためにも、エビデンス（科学的根拠）に基づいた介護であることが必要となってきます。

介護の実践には、対象である要介護者や、その人をとりまく多くの人たちとの関係性の構築、そして日常生活への支援と、専門職としてさまざまな技術が必要となります。そしてそれらの技術は、要介護者にとって最適な方法でなくてはなりません。そのためには、どのような目的で、どのような方法を用い、どこでどのように行うのかなど、その人のその時に応じた方法を考え、実践する能力が必要となります。まさしくそれは、新カリキュラムにおける、「他者に共感でき、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につけ、あらゆる介護場面に共通する基礎的な介護の知識・技術を習得すること」を目標とし、「利用者ひとりひとりの生活している状態を的確に把握し、自立支援に資するサービスを総合的、計画的に提供できる能力を身につける、円滑なコミュニケーションの取り方の基本を身につける」という求められる介護福祉士像にほかなりません。つまり生活支援技術は、単にそのやり方を覚えるということではないのです。「考える生活支援技術」でなくてはならないのです。

第3巻では、介護に必要なコミュニケーション技術、生活支援技術を、エビデンスに基づいて説明していきます。

そして本テキストの特徴は、技術の方法を解説するだけでなく、要介護者が安全で快適な生活を継続していくために必要な生活支援技術を考えるために、ICFの概念図を用いながら、行動レベルでの介護技術まで論理的に説明していきます。何げなく行っている行為にも意味があることを、実感できるのではないのでしょうか。

根拠に基づいた介護の実践を行うことが、要介護者のQOLの維持・向上につながり、またそれが専門職としての喜び、誇りへとつながるでしょう。

2013年12月

編者を代表して 岩井 恵子